



# せたかむい

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第八十七号(毎月一日発行)  
平成八年十二月一日

## 鯉海の 古平風土物語 (五四)

汽笛が遠かつた  
積丹沿岸の生活

高橋 源 五口

### ■陸の孤島

この頃の積丹半島一円の交通事情は、まさに『陸の孤島』であった。そして、このような不便な時代が、ほぼ国道が開通するまで続いたのであった。

表積丹方面では、余市駅につながる余市港—古平港—美国港の間を、『通信省指定』という旗を立てて走る定期貨客船の末広丸(木造船で二十シガラい?)ただ一隻に頼っていた。なごのよい夏季節(四月から十月)は月に二往復、冬季節はほとんど一往復という状態であった。

その当時は、二港ともに防波堤も突堤もない天然のままの小

さい湾であったので、しけになると欠航していた。

(余市・古平間の航行距離は約二十き、余市・美国間は約二十八き)

古平・余市港間の所要時間は一時間余りであったが、海が荒れると相当長く時間がかり、大しけに遭って五時間ぐらいかかり、あわや遭難かと思われたこともあった。船になれない人は船酔いに苦しみ、特に女の人たちの中には船内で四苦八苦する人が多かった。

しけることの多い冬期間には二、三日の欠航があり、月の半分ぐらいいも欠航するような年もあった。そんな時は、日用品や

食料品などにも影響があり、新聞はドサツと配達される。

美国町から先の村々には定期船の便はなく、陸路を馬車か、冬には馬そり、ほとんどの人は歩いて美国港まで出て来るのである。貨物運搬船か漁船などに便乗して、余市・小樽方面に出る人もあったがそれらは僅かであった。この地域に住む人たちにとってはまったく不便で、大変な苦勞であった。

※陸路の旅人のために、積丹街道の道筋にはいくつかの休憩所があった。美国茶屋・団子茶

### ◆ニイホウケのこと

ニイホウケというのは、ニイ木・ホウケII跳ねるということで、これもアイヌの人の遊びである。

長さ十メートルぐらいの縄を二人で引っ張り、高さ一メートルぐらいにして持つ。それを棒を持った者が飛び越え、飛び越えたと次第に高くするが、三メートル程の高さを飛び越える者もいるという。

## アイヌの [ことわざ] から 世間はなし集

屋(美国峠の上った所)、小樽茶屋(今でも名前が残っているが幌武意・野塚の分岐点)などがあり、ここで秀峰積丹岳を眺めながら一服の休息をする。小樽茶屋には駅通所もあって、ここで野塚・余別方面と浜婦美・幌武意・入舸方面とに分かれていた。

余市・古平間の郵便物は、送天と言われる人が背負って運んだ。

「今日は運送も休んだ」といえば、それはよほど猛吹雪の悪天候であった。

海がうず巻くと、これはオキナという大魚のせいだと言おう。アイヌの人たちはアトイコロカムイと呼んでいるが、アトロII海・コロII持つ・カムII神で海持神という意味である。大きさが八〜十キメートルという途方もない大魚で、背中は黒くまるで小山のようだといわれ、海に住む神として祀られている。有名な林子平の書いた本(三國通覽)の中にもこれは出ている。

▼伸びる坑道

隆盛坑 四九一メートル  
 朝日坑 一〇九〇メートル  
 左金坑 一二〇〇メートル  
 右金坑 一二八〇メートル  
 中ノ坑 一五〇メートル  
 万盛坑 四九二五メートル

新たな増産計画による  
 鉱区の拡大と共に、坑道も次々と掘り進められて行った。

▼鉱山へ各地から動員  
 何よりも軍需産業が優先され、学生や、各地で勤労報国隊、産業挺身隊が結成されて、軍需工場や農村に動員され、稲倉石鉱山にも多くの人たちが各地から動員されて来た。古平町内からも商店や独身の女子などが、慣れない仕事に動員された。

昭和十九年には、八月十七日から十月二十七日までの七十二日間にわたって、俱知安勤労報国隊員として十五人が来たという記録があるが、このような団体は入れ替わりでいつも来ていた。

＝百年の歴史を閉じる＝

# 稲倉石鉱山®

▼増産体制の中で終戦

昭和十七年九月、政府から百万円の補助を受け、総工事費三百万円、出戸の沢に月産二万トンの浮遊選鉱場を建設し、さらに輸送能力を高めるため、元山・港町間の第一索道建設工事にも着手した。

昭和十八年八月、これらの建設工事を進める中で港町貯鉱所の増設工事が竣工し、ただちに運転が始められた。

この年、国家総動員法が改正されて統制・罰則規定がいつそう強化され、これにより稲倉石鉱山は陸海軍の管理、監視下に入ることになり、いつそう厳しい増産態勢を迫られることになった。

増産を図るため、同年九月には余市駅に隣接した黒川町の果樹園を買収し、敷地約一万七千坪に鉄興社余市製錬工場を新設し、マンガン鉱の電気製錬を行った。そしてこの工場に、稲倉石鉱山からマンガン鉱石を直接輸送するため第三索道の建設を計画し、着工したが間

もなく終戦になり、この建設工事は廃止された。

終戦の翌日、鉄興社では各現場に、応急措置として次のような通達を出している。

昭和二十年八月十六日  
 工場長 殿  
 常務取締役 前島憲平 殿

通 牒

今般非常措置トシテ目下稼働中ノ勤労隊、動員学徒隊及挺身隊ノ協力ニ関シテハ本日限り使用中止ト致候、ツイテハ至急解除手續被成下度此段及通達候也  
 以上

■射水丸襲撃の様子を語る

襲撃の当日、突然のことに驚いて、あわてて防空壕に飛び込んだ人や、裏山に逃げた人、また、家の中でじっと息をひそめて見守っていた人もあった。

この時の様子を目撃し、その後、救助活動に当たった人たちがいたが、その中のひとり、細野六次郎さんは次のように語っている。

「朝飯を食べている時だった。飛行機が低空で飛んで来たのを見ていたら、それがアメリカの

▼射水丸撃沈の悲劇

戦況も不利になり、終戦も間近い昭和二十年七月十五日午前六時半頃、港内でマンガン鉱石を積込中の汽船射水丸が、アメリカの艦載機グラマン一機の攻撃を受け、一弾が機関部に命中し撃沈された。折から荷役中のは

しけ一隻も銃撃を受けて転覆した。射水丸の乗組員や作業員は海に飛び込み、岸に泳ぎ着いて助かった者もあったが、二十一人が痛ましい犠牲になった。

※ この事件については、次号でもお伝えします。

飛行機だった。空襲警報もなにもなかったからびつくりした。

飛行機は二、三回旋回してから小樽の方に飛んで行ったので、ヤレヤレと思って安心していたら、それから間もなくまた飛んで来て、裏山の上すれすれのところからバリバリと機関銃を撃ちながら、射水丸に爆弾を落とした。水柱が上がったと思ったら、あつという間に船は沈んでしまった。すぐ目の前の出来事だし、もうびつくりしてしま

った。  
 (以下略)



# 幼馴染みとの出合い

渡 辺 ハ ツ エ

過日、お盆の中頃のことでした。外へ出たところ、私と同じ年代くらいのひとりの女性が近づいて来て、

「この辺だと思いますが、渡辺さんのお宅をご存じないでしょうか。」と尋ねられ、

「はい、私が渡辺ですけど」と答えると、その女性はホッとされた様子で、

「私は、昔、この辺に住んでいた小林えみ子と申します。けえ子さん、いらつしやいますでしょうか。」

私はとっさに、  
「あらー、えみ子さん！驚いたわ。しばらくねえ、何年振りねえー」

私の声はうわずっていました。えみ子さんは続けて、  
「姉も来ています。息子が私たちの故郷へ連れて来てくれました。当時とはまったく変わって

いますけど、長年住み慣れた、川の側にあった家のことはよく覚えていますよ。」  
と、とても感慨ぶかけな様子でした。

お姉さんも顔を見せてくれました。長身でスラッとしたきれいな方で、昔の面影が鮮やかによみがえって来ました。お二人の間にはたしか男の兄弟がい

## 積丹一周道路の完成を喜ぶ

北 政 道

昭和六十二年八月十二日、積丹町と神恵内村との不通区間の積丹トンネル七百一メートルが貫通し、その式典が盛大に行われたことが新聞で報道されたが、この時、あの豊浜トンネルの岩盤

たはずでお聞きしたら、沖縄の激戦地で戦死されたとのこと、好青年でしたし、痛ましいことだと心が暗くなりました。

私は、けえ子が丸山町の山内さんに嫁いだことを告げると、一歳年下で、けえ子とは大の仲良しであったえみ子さんは、とても懐しがつておりました。

思い出すと、昔は道路を挟んで家の前は海でした。子供たちは日没も気にしないで海で泳いで、ツブをとり、カニを捕まえ、小魚を釣って、すばらしい環境の中で少女期を過ごしました。その時の忘れられることのでき

盤崩落事故が起きようなどとは予想もしていなかった。

戦後、間もなくして余市・古平間、その後、古平・美国・余別までいくつものトンネルが掘られて、国道229号線沿線の住民は大きな恩恵を受けたが、

ない幼なじみの人なのです。私と話をして別れましたが、妹とは会えなかつたようで、あとで妹に話したところ、

「逢いたかつたア。残念だわ。せめて住所でも聞いておいてくれたらよかつたのに……」

私は、住所もなにも聞いてなかつたのを後悔し、私の軽率だつたことを心の中で詫言しました。なにか、悠々と大空に舞っていた凧が、突然、糸が切れて手を離れ、どうしようもなくなつた凧を見送っているような私の心境です。

えみ子さん、もう一度故郷へお出で下さい。お願いします。

積丹町沼内から神恵内村までのわずかな不通区間は、依然、昔ながらの障害として残つた。江差追分にもあるように、蝦夷で名代のお神威様はなぜに女の足止める  
今じゃ磯辺のこめめでさえも夫婦仲良く眠る波  
と歌われ、特に西の河原付近は人里遠く離れた地で、海からでないといけな場所であつた。

※ (四ページ二段目へ)

# 遙かなる故郷の思い出 (27)

## 『きつね』の話 (4)

橘 義我 春

—その三—

旧自動車道路の群来村と、熊木の浜との中間あたりの道路脇に、小さいお堂が建っていた。そして、このお堂の横に四角い柱が三本立っていて、その柱のつべんに鉄の輪のようなものがついていた。何のいわれなのか解らないが、それを回すと、「カラカラッ、キー」と、気味の悪い音がする。

ここは肩間でもキツネが出て人をだますというわさで、一人でその前を通る時など気持ちの悪い所であった。

入船町に、味が良いと評判のかまぼこ屋さんがあった。

その主人が、かまぼこの入った御用籠を背負って美国まで配達に行つての帰り、キツネが出るといわれているそのお堂の前で、残っていたかまぼこを道

端に並べて、  
「さア買ってケレ、出来たてのホヤホヤだぞ。特別安くしておくべえ。お客さん！」

なんと、かまぼこの安売りを始めたのである。いかにも前に大勢のお客さんがいるような話し振りだったという。

そこへちよつと、これも美国へ用足しに行つて帰りの丸山町の人が通りかかち、  
「オイ、かまぼこ屋さん、なにやつてん夕バー——」

声をかけたら、本人がキョトンとして、  
「あれ、おかしいなア。いっばいいいだお客さんとこサ行つたんだべ？」

「おらア、さつきから見でたども、人なんかナンもいながつたなア——。キツネにでもだまがされたんでねエのが？」

そしたら、かまぼこ屋の主人は

首をかしげながらいかにも不思議だ、という顔つきで、また御用籠にかまぼこを入れながら、「おがしいナ、おがしいナ」と、さかんに首をひねっていたそうだ。

これを見た人が誰かに話したことだから、このうわさはすぐに広まった。当時のことを記憶されている人がまだいると思う。

その頃は「キツネは人をだます」ものだと、誰もが信じていたのだ。

さて、かまぼこ屋さんの遭遇した、世にも不思議なこの怪奇現象は何だったんでしよう。これもキツネの仕業？ と思つた方がロマンがあつてエエンでねエベガ——。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§

※ (二ページ下段より続く)  
西の河原トンネルの工事は難行し、中にはマムシにかまれて、血清のある蓮実病院に入院した人も二、三人いた程である。

積丹一周海岸道路の建設は、最初の国道開通からの工費を入れると巨額になるが、日本復興の経済力のお陰で、陸の孤島も過去の歴史として語り継ぐこ

とになった。

私らの子供の頃は、余市から定期船で古平へ、さらに美国へと日用品をはじめ雜貨類、郵便までが運ばれ、ローソク岩を眺めながら一時間余りもかかり、途中、酔いに苦しんだこともあり思い出は尽きない。

交通網の発達により、積丹半島はすっかり様変わりをし、若者は都会へ出て、漁業や農業、商業などの後継者が減り、過疎化の波は変えられず、これからの国道沿線での町造りと、将来の展望が問われようとしている。

積丹半島一周道路の完成を祝いながら、豊浜トンネル崩落による尊い人命失われたことを思い、犠牲者のご冥福をお祈りすると共に、ご遺族の方々の心安らぐ日の一日も早いことを願うものである。

また、再びこのような惨事を起こさないことを関係当局に切に要請し、一周道路完成の明るい将来を期待するものである。



俳句

古平ホトトギス会

木村芳園

倉敷の古き家並みの紅葉晴れ

七五三表参道親子連れ

大島喜恵

病床に娘が活けくれし寒椿

寒灯下鬪病日記新しく

水見句丈

昆布干す島に少なき日照どき

夏服の卒寿は紺ときめて買う

越野清治

秋の雨もらい傘せし家路かな

秋晴れや名水に喉うるほせる

斉藤波留

栗拾ふ子等入りかわり立ち替わり

独り居の気の向くまゝに冬支度

福井幸平

河底に果てたる鮭の姿かな

雪虫を散らし大型バス発車

山口浪

ロスよりの子等待ちわびて秋墓参

冬支度済ましホームへ戻りけり

越野スミ子

大根干す家珍しき団地かな

稲架一間借りて大根懸けにけり

仲谷比呂子

羊蹄の姿整ふ雪化粧

もう終の彩に落着く四葩かな

四葩ニあじさいの古い呼び名

渡辺ハツエ

看取られぬ身の幸で亡夫を見る

丹前の温もりここに亡母が居る

石井愛子

日溜りに路傍の石も温もれり

空高く祖母も浮立つ散歩道

熊谷楠丈

大鮪糶を待つ間の化粧水

越野敏雄

家を出てすぐゴルフ場草紅葉

堤防のつづく限りの草紅葉

大和田絵伊

父の忌やマーガレットの咲く寺領

優勝を決めし一球炎天下

仲谷美砂

供華にする菊を惜しみて苜りにけり

点滴を眺めてばかりいる夜長

福井久美子

本殿は山に囲まれ蟬時雨

怠けてはおれじ万歩の汗をか





# 岬短歌会詠草

短歌

とけし霜とぎれとぎれにリズムつけ小屋根に落ちる音のさびしき  
 頂きし教育文化貢献賞テレビの上に置き日夜眺めぬ  
 久しぶりに泊りし子のため朝餉にとだしを利かせて味噌汁つくる  
 初牡丹庭に開きてかすかなる呼吸するごとく 紅くれない 冴えぬ  
 まるくなりし吾が背に掌を当てひたむきに生きよと娘はねぎらひくれぬ  
 パースディに遠くより届きしシクラメンもえる 紅くれない に心おどらす  
 優秀なる事務官なりし君が日々用ひしワープロに触れて偲びぬ  
 笑ふもあり泣けるもありて公園には遊べる児らに秋の陽やさし  
 同室に几帳面なる老いの居て窓の汚れを繰り返し言へり  
 から松おちば雪の畑に散りきて風に吹かるる日に光りつつ  
 五十年経し舅の筆あとよ古き書よみたづねて夕づく部屋にひとり居り

竹内コト  
 長崎フユ  
 鈴木時子  
 越野敏雄  
 池田テル  
 越田由起子  
 轟木富美子  
 金杉すみ  
 菅原節子  
 東美知  
 山口スエ



海沿ひの道のひとところ水戸関の塩まく如く波しぶき飛ぶ 堀 昭子

岸は黄に染む硫黄源にて大湯沼晩秋と言へど湯気立ちこめぬ 榊 佳代

早朝の凍れる沖に出る夫の背中に貼りてやる今朝も 田 中 香 苗

贈られし温かきシヨールを肩に掛け霜月のまち美容院に行く 水 口 キ エ

葉師さまの小さき御堂のそば高く大木の紅葉もゆるごとしも 丹 後 初 江

磯舟を傾け蛸を引き揚げて漁師はゆっくり權を廻せり 堀 典 子

酔ひしれてとめどなく出る涙なりこの苦しみしみの洗はれてゆけ 魚 屋 友 子

ストーブのそばで

### 餅のカンナガラ

福 井 幸 平

例の如く古い話で恐縮ですが、昔は一般家庭は石炭を焚くか薪を焚くかで、円筒掃除なる嫌な作業があった。現在でも例外的にあるかも知れないが？そのため、ストーブの上で物を焼く、煮るという便利さもあつたようだ。

忘れられないのは餅を焼く、円筒に切り餅を擦り

つけてカンナガラなる食べ方があつた。勿論、余り熱くても駄目、こげない程度の温度が必要である。

どうしてあのような食べ方があつたのか分らない。古老の方なら、ああ、あのカンナガラ、カンナガラなら知ってるよ。と、想い出していただけだと思う。石油ストーブでは、カンナガラにならないようだ。

